

児童がめあてを意識し見通しを持って参加できる外国語の授業を目指して

－ ルーブリックを活用した課題の提示と評価の工夫を通して －

名取市立那智が丘小学校 櫻田 淳也

1 目指す授業像

ルーブリックとそれに基づく振り返りシートを活用し、課題提示及び評価活動を効果的に取り入れることで、児童が学習のめあてや単元の目標を意識し、見通しを持って参加することができる授業

2 研修テーマ・目指す授業像に迫るために

これまでの授業実践では、各時間の活動を明確な評価基準に基づいて設定していなかったり、単元の最終目標を具体的に提示せず、1時間ごとの学習内容が十分につながらないことで、児童の理解や英語への親しみを深められなかったりしていた。そこで、児童が学習のめあてを意識し、何を身に付けていくのか見通しを持って参加することができる授業づくりを目指したいと考えた。そのために、めあてと活動と評価が一体化した授業の在り方の一検討として、活動の評価基準表となるルーブリックを用いた単元構想と授業づくりを進めることとした。ルーブリックとそれに基づく振り返りシートを活用した課題提示及び評価活動を取り入れるとともに、単元の最終目標を児童に提示することで、教師と児童が学習のめあてを共有し、活動内容や目指す姿に見通しを持って授業に参加できるようにしたいと考え、以下の手立てを講じて実践を行った。

- (1) ルーブリックと振り返りシートを活用した課題提示と評価活動
- (2) パフォーマンス課題の設定

3 I期の取組について【単元名 Unit2 When is your birthday?】(「We Can! 1」文部科学省)

(1) 研修テーマに迫るための手立て

5月に実施した意識調査では、「単元のめあてを意識している」児童が51.4%、「1時間のめあてを意識している」児童が57.1%と、学習のめあてに対する意識は高くなかった。そこで、I期では、単元や授業における学習のめあてを明確に提示し、具体的な目指す姿に見通しを持たせるための手立てを講じた。目指す姿が具体化されることで、児童が見通しを持って授業に参加できるようにするとともに、それに沿った評価基準を設定し、児童が共通の評価基準で自他の活動を見合うことが達成感や次への意欲につながるような授業を目指し、実践を行った。

(2) 具体的な手立て

① ルーブリックと振り返りシートを活用した課題提示と評価活動

ア 単元のルーブリックの活用

児童が目指す姿を具体化するために、身に付けさせたい力とその評価基準を観点別に示したルーブリックを作成した(図1)。本単元では、単元全体の活動内容から「尋ねる力」「答える力」「書く力」「伝えるための工夫」「伝えようとする姿勢」の5観点の基準を設定した。児童が中心活動に取り組む際には、ルーブリックに沿って、どのように活動に取り組むか具体的に目標を設定できるようにした。また、児童がルーブリックを

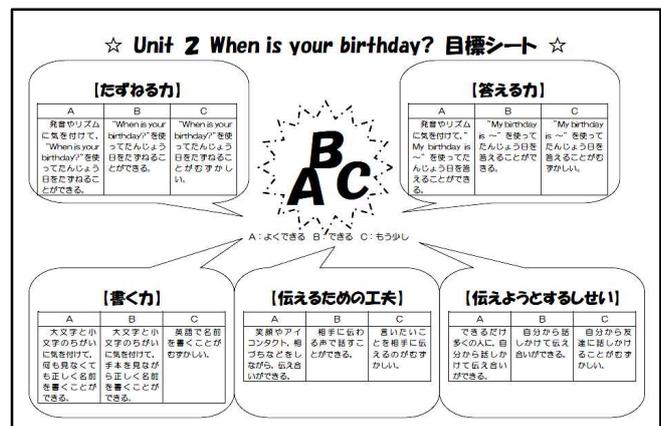


図1 I期ルーブリック

参考にして自分の取組を振り返り、評価を記入することで、自分の達成度や単元を通じた成長に気付くことができるようにした。

イ 振り返りシートの活用場面の設定

ルーブリックに基づいて、自己評価の観点と毎時のめあてを記載した振り返りシートを作成した(図2)。本単元においては、主に、導入と終末の段階で振り返りシートの活用場面を設定した。

まず、導入段階では、「今日のミッション」として示された本時のめあてを確認し、児童が見通しを持って授業に参加できるようにした。また、終末段階では、ルーブリックの観点別に評価規準を示した「ふり返り項目」に沿って、めあてや活動に対する自己評価を行った。

② パフォーマンス課題の設定

ア ルーブリックとの関連

単元を貫く最終目標としてパフォーマンス課題を設定し、その課題を通して目指す姿を、ルーブリックを用いて全体で共有した。本単元の課題は、「友達に誕生日などに関して質問し、分かったことを基にその友達宛のバースデーカードを見つけて渡す」とした。授業実践では、基本表現の正確さに加え、表情や動作、会話の流れなども意識して取り組ませた。また、ルーブリックに基づいて代表児童とALTのデモンストレーションの良い点を確認し、共有することで、次時のパフォーマンス課題への見通しを持たせた。

イ 課題に求められる表現の段階的習得

パフォーマンス課題に向け、単元全体を通して、発音練習やゲーム、インタビュー活動などによって表現に十分に慣れ親しむことができるように構成した。授業実践では、Small Talk、インタビュー活動で、児童は実際にパフォーマンス課題で求められる表現に繰り返し触れられるようにし、意欲の向上を図った。

ウ Small Talkの活用

パフォーマンス課題に向けて、児童に必要な語彙や表現を段階的に習得させる取組として、Small Talkを活用した。毎時間の帯活動として取り入れ、第1時から、少しずつ扱う言語材料を増やしていった。また、ALTとの対話に挑戦した児童の発音や、答え方、表情などについて、ルーブリックに基づいて良かった点を取り上げることで、パフォーマンス課題に向けてコミュニケーションのモデルを提示し、目指す姿を具体的に捉えられるようにした。

(3) 成果と課題 (○：成果、●：課題)

① ルーブリックと振り返りシートを活用した課題提示と評価活動

- 授業実践後に行った意識調査では、87.9%の児童が「授業のめあてを意識して授業に参加できた」と回答をした。1時間の授業のめあてを明示し、全体で確認、共有することを繰り返す中で、個々の児童がめあてを意識し、見通しを持って授業に参加できるようになったことが分かった。また、97%の児童が「単元のめあてを意識して授業に参加できた」と回答しており、単元全体を見通して授業に参加することができるようになってきた。
- ルーブリックの取組を継続する中で児童が使い方に慣れていった。意識調査によると、93.9%の児童が自己評価にルーブリックを活用できていると回答しており、自分の取組を見る際に、ルーブリックの基準を参考にしながら考えることができるようになってきた。
- 単元のルーブリックを構成することで、単元で指導すべき内容や重点項目、児童に意識させたいことなどが整理され、指導の観点を明確化できると感じた。そのことで、授業中に児童と

外国語活動 ふりかえりシート

5年 1組 番 名前

Unit **2** <テーマ> **世界の行事・たんじょう日**

ふり返り項目	1	2	3	4
たんじょう日について話すことができる。(話すねか)				
たんじょう日について答えることができる。(答えるねか)				
英語で名前を書くことができる。(書くねか)				
伝えたいことがわかりやすく工夫ができる。(伝えるための工夫)				
英語を使って喜んで伝え合いができる。(伝えようとするしぐさ)				

A:よくできる B:できる C:もう少し

<感想>

今日のミッション	感想(会話や活動の楽しさ、友達のおかげ、新しい発見など)
1 ☆ 世界の行事や祭りについて知り、日本とのちがいを見つけよう!	☆☆☆☆☆
2 ☆ 日にちや月の正しい方を見えて、自信を持って答えるようになるう!	☆☆☆☆☆
3 ☆ たんじょう日のたずね方や答え方を見えて、友達とたずね合おう!	☆☆☆☆☆
4 ☆ 友達とたんじょう日や好きなものについてたずね合おう!	☆☆☆☆☆

【ラストミッション】
友達のたんじょう日や好きなものをたずねて、その人にバースデーカードをわたそう!

図2 I期振り返りシート

目指す姿を共有できるようになり、具体的な助言がしやすくなった。さらに、児童にとっても目指す姿が明確となり、助言を生かそうとする姿勢も見られた。

- ルーブリックのA～Cの基準を示す文言を、児童にとって分かりやすいものにすることができなかった。意識調査では、33.3%の児童がルーブリックのA～Cの基準について、その記述内容や差異が分かりにくいと回答した。

② パフォーマンス課題の設定

- 課題の内容を、単元で扱う表現や語彙を活用して取り組むものに設定したことで、児童にやってみてみたいという意欲を持たせることができた。また、単元の第1時からパフォーマンス課題を提示し、声掛けや板書、振り返りシートなどで常に意識付けを図ることで、単元を貫くめあての意識化を図ることができた。
- Small Talk の取組では、徐々に語彙を増やしたことで、単元で扱う表現や語句に段階的に触れさせることができた。また、HRTとALTの会話の後に、必ずその内容について質問を投げ掛けることで、会話を聞き取ろうとする意欲を高めることができた。さらに、気付いたことや聞き取ることができた内容などを全体で共有しながら、パフォーマンス課題で扱う表現や語句の導入として活用することができた。
- I期の取組では、児童による自己評価を中心に行ったため、児童の相互評価については十分に組み込めることができなかった。II期では、児童の相互評価との関連を深め、パフォーマンス課題を通して、児童が達成感を得られる評価方法を検討していくこととした。

4 II期の取組について【単元名 Unit5 She can run fast. He can jump high.】

(「We can!1」文部科学省)

(1) 研修テーマに迫るための手立て

I期の実践では、単元のルーブリックを作成し、それに基づいた振り返りシートを活用した授業を実施した。授業実践後に行った意識調査では、多くの児童が、「振り返りシートを使用することで単元のめあてや本時のめあてを意識して授業に参加できた」と回答した。

一方で、児童にとって使いやすいルーブリックを目指すため、単元の内容に応じて、基準の記述の仕方や基準の差異をどう示すか、また、ルーブリックを児童相互の評価活動にどうつなげていくかという課題が残った。そこで、II期はルーブリックと振り返りシートの構成を再検討するとともに、児童が相互評価を通して達成感を感じたり、友達の良さを見つけたりすることができるような活動を設定し、実践を行った。

(2) 具体的な手立て

① ルーブリックと振り返りシートを活用した課題提示と評価活動

ア 単元のルーブリックの再構成

単元全体の活動内容から、「尋ねる力」「話す力」「聞く力」「伝えるための工夫」「関わろうとする姿勢」の5観点を評価の基準として明確に設定した。さらに、I期の課題を受け、児童の視点からも評価基準の表記や差異を検討し、より具体的に「よりよい活動の取組の姿」を共有できるようにした。どのような姿がA評価に値するか、児童から出された意見を整理、精選し表記を決定した。このようにして、児童が主体的にルーブリック作成に関わる場面を設け、単元を通したルーブリックの活用と評価基準の共有化を図った。

イ 振り返りシートを用いた相互評価の場面設定

本単元では、毎時間の中心活動や、単元の終末に行うパフォーマンス課題で相互評価の場面を設定した。友達と互いの活動を見合う際には、ルーブリックに記載された5観点到に沿って、共通の視点で意見を交わし、具体的に良い点や気付いたことを振り返りシートに記入させた。

② パフォーマンス課題の設定

ア 課題内容の設定

本単元の課題は、「学校の先生方にインタビューを行い、その先生ができることやできないことについて4年生に英語で伝える」こととし、下級生にも分かりやすく伝えるという目的を持たせ、児童の意欲を高めた。授業実践の中心活動はそのスピーチのグループ練習となるため、本時のグループ活動がパフォーマンス課題に直結することを意識させた。

イ ルーブリックを用いた相互評価

授業実践でのグループ活動では、児童が互いの発表の良い点や改善点を、観点を明確にしなが見合い、具体的に助言し合うことで、頑張りを認め合い達成感を味わえるようにした。そのために、ALTによる事前のデモンストレーションでは、良くない例と良い例を示し、ルーブリックに基づいて児童たちが意見を出し合うことで、互いの発表を見合う際の観点を確認できるようにした。また、グループでの活動後には、助言を基にパフォーマンス課題に向けた目標を再設定する時間を設け、次時で行う発表に向けて具体的な見通しを持たせた。

ウ Small Talkの活用

パフォーマンス課題に向けて、既習事項の定着やコミュニケーションへの意欲の向上を図るため、単元全体を通してSmall Talkの内容につながりを持たせた。また、児童自身が考えや思いを表現する場面を増やすため、HRTとALTによる会話の途中で、児童にも話題について問い掛け、会話に参加させるようにした。そのことで、児童とのやりとりも含めたSmall Talkの時間となるように留意して進めた。自信のない児童の抵抗感を減らすために、気付いたことを日本語でも積極的に発言させ、ひとまとまりの会話を聞き取ったりテーマに沿って話したりすることに慣れ親しむことができるようにした。

(3) 成果と課題 (○：成果，●：課題)

① ルーブリックと振り返りシートを活用した課題提示と評価活動

- 振り返りシートの自由記述欄に、友達を取組の良かった点に関する記述が多く見られるようになった (図3)。

ルーブリックの記述に基づいて友達の良い点を具体的に賞賛していたり、相互評価を通して得られた達成感や目標を述べたりしているものが増え、ルーブリックの活用により相互評価の広がりが見られた。

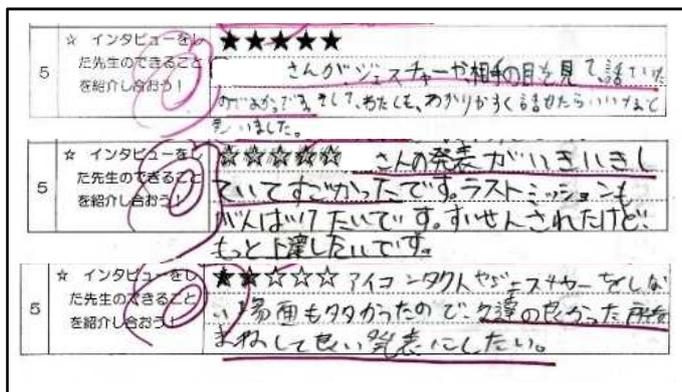


図3 児童による振り返りの自由記述

- ルーブリックの作成では、児童と一緒に話し合い、分かりやすい表記を目指すことができた。

話し合いで出された児童の意見には、ルーブリックを活用してきた中で児童自身が感じ取った「よりよい姿」が現れており、ルーブリックを使うことへの慣れと、外国語活動における良いコミュニケーションの姿を具体的にイメージできるようになってきた様子が見られた。実践後の意識調査では、94.3%の児童が「自分たちでルーブリックの内容を話し合ったことで、より分かりやすいものになった」と回答しており、児童の言葉で評価基準を設定したことで、児童にとってより使いやすいルーブリックにすることができた。

- ルーブリックの観点を整理するなかで、「伝えるための工夫」の要素をまとめた、「那智小コミュニケーションルール」が生まれ、全校で活用することになった (図4)。ALTとも指導の観点を共有



図4 那智小コミュニケーションルール

することで授業が一層進めやすくなった。

- パフォーマンス課題がスピーチ発表だったため、5つの観点の中で、「伝えるための工夫」（那智小コミュニケーションルール）に児童の自己評価の意識が偏る傾向が見られた。今後は、複数の観点から活動を振り返り、「聞く力」や「関わろうとする姿勢」など、総合的な視点で自己評価ができるようにルーブリックの活用方法を検討していく必要がある。

② パフォーマンス課題の設定

- 単元の最終課題となるパフォーマンス課題を第1時から示し、全体で共有することで、毎時間のめあてが何のためにあるのかを意識させることができた。振り返りシートの記述を見ると、その時間でどのような力を身に付ければよいのか、次の時間はどのようなことを頑張りたいのかなど、見通しを持って学習に取り組む児童が増えてきた。
- 自分がインタビューした先生について下級生に紹介するという事で、分かりやすく伝えようという意欲を高めることができた。また、授業実践でのグループ発表で見た成果と課題を基に、よりよい発表になるよう工夫をしている姿が多く見られた。
- Small Talk の取組では、会話の途中にも積極的に児童に話しかけ、児童とのやり取りも踏まえながらHRTとALTの会話が進むように心掛けた。そのことでSmall Talkが「聞く時間」から「会話に参加する時間」や「一緒に考える時間」になってきた。また、パフォーマンス課題に向けて、単元を通して内容につながりを持たせたことで、対話の内容を理解したり想像したりできる児童が増え、パフォーマンス課題につながる語彙や表現を段階的に習得していく様子が見られるようになった。
- 今回の課題は、インタビューで得た情報のみを伝えるスピーチであった。「話すこと（発表）」の力を伸ばす上で、調べたことや分かったことの発表に加え、自分の意見を述べられるようにしていきたい。

5 1年間の総括

(1) 研修の成果

① ルーブリックと振り返りシートを活用した課題提示と評価活動

平成30年5月と12月に行った意識調査の比較では、全ての項目において数値の上昇が見られた。特に、「本時のめあてを意識して参加している」「友達の良さを見付けている」の2つの項目において伸びが見られた(図5)。単元のルーブリックを作成し、それに基づいた振り返りシートを活用することによって、児童が単元の目標及び本時のめあてを意識し、見通しを持って活動に参加することができるようになった。また、共通の評価基準を設定することで、自他の活動を見る際に同じ視点で見合うことができ、互いの良さや改善点を積極的に伝え合うことができるようになってきている。ルーブリックの作成に際しては、児童の意見を取り入れながら作成を行った。意識調査では、「自分たちで作ったから、振り返りの基準が分かりやすく、考えやすい」「自分が目指している目標がみんなと同じ目標だから、他の人の良い所をまねしたり、競ったりできるからとても良かった」という回答が得られた。児童の実態に即した、児童にとって使いやすい、

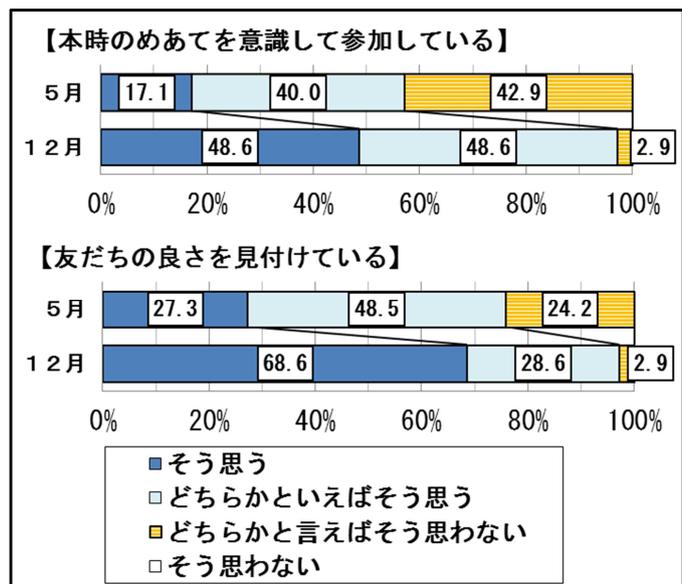


図5 外国語活動に関する意識調査の結果 (n=36)

実感を伴った評価基準の設定が今後も必要である。

② パフォーマンス課題の設定

単元の第1時からパフォーマンス課題を提示し、毎時の授業を進めていったことで、児童が最終目標を意識して活動できるようになってきた。意識調査の記述にも「パフォーマンス課題に向けて英語を頑張るようになった」「いつまでに何を覚えればいいのか考えられる」「目標で『今日はここまで頑張るぞ』と思えるようになった」などとあり、パフォーマンス課題が学習意欲の向上につながっていることが分かった。

また、パフォーマンス課題に向けた段階的な取組として Small Talk の時間を継続して設定することで、児童がその内容から本時で使われる単語や表現について見通しを持つことができるようになってきた。さらに、ルーブリックに照らし合わせながら HRT や ALT の話し方を見聞きすることで、コミュニケーションをよりよいものにしようとする姿勢が見られた。Small Talk を通して学習の見通しを持たせるためには、単元を通して、内容や扱う語句に連続性や発展性を持たせることが効果的であると考えられた。

今後は、単元の目標や指導内容に応じて、児童が「やってみたい」と思う課題を設定し、その課題に向けて授業を構成していくことを目指していきたい。

(2) 今後の課題

ルーブリックの作成や振り返りシートの活用などを継続してきたことで、多くの児童が学習のめあてを意識し、活動への見通しを持って授業に参加できるようになった。ルーブリックに設定した児童の姿は、児童がめあてとして目指すものであり、教師がそこまで育てたいという願いでもある。今後も、教師と児童が単元を通してめあてを共有し、1時間の授業をつくり上げていくことを目指していく必要がある。そのため、次年度は、今年度の研修内容を踏まえ、次の二点を課題とし、研修を深めていきたい。

① ルーブリックの作成方法及び活用方法について

ルーブリックの内容、構成については、今後も単元の内容に応じて評価の観点や基準の記述内容などの検討が必要である。児童にとって使いやすいものにしていくためには、評価基準の記述について、児童の実態に応じて考えていくことが求められる。また、相互評価で受けた助言などが児童の次の課題設定につながるよう、単元の中でルーブリックを活用した自己評価、相互評価の場面をどのように設定するか、十分に検討していく必要がある。

② 効果的なパフォーマンス課題の設定と評価方法について

パフォーマンス課題の内容を、対話やスピーチによる「話す力」だけではなく、「聞く力」や「書く力」など、ルーブリックで設定した観点を多面的に見るものにしていく必要がある。その際、児童が課題に取り組むために必要となる語彙力や表現力を、単元全体を通して段階的に習得することができるよう、単元の指導計画を構成していく必要がある。さらに、児童によるパフォーマンス課題の取組を教師がどのように評価し、どのような形で児童に伝えていくのかも今後の課題である。児童の相互評価との関連も深め、パフォーマンス課題についての教師や友達からの評価が、次の単元に向けた意欲向上や新しい目標設定につながるものになることが求められる。

主な参考文献

- | | |
|------------------------------------|------|
| [1] 文部科学省：「小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編」 | 2017 |
| [2] 文部科学省：「小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック」 | 2017 |

図表等の許諾について

図3は、児童のワークシートの一部である。児童氏名を伏せて資料を活用することとし、児童の保護者から報告書での使用許諾を得た。